



第 32 号
編集・発行
信州大学附属図書館
繊維学部分館
平成11年7月23日

CONTENTS

インパクト係数(Impact Factor)を考える	応用生物科学科	保地 真一	(2)
「オブラディオブラダ」思考	機能機械学科	小西 哉	(6)
分館通信	図書館オリエンテーション実施報告		(9)
	告知板		(11)
	分館日誌		(12)
編集後記			(12)

Library(電子版)はインターネットでも提供しています。
URLは <http://shinlis2.shinshu-u.ac.jp/online.html> です。

↑ 以前と URL が変わりました！

インパクト係数 (Impact Factor) を考える

応用生物科学科 保地 眞一

図書委員会、広報担当である私に「7月2日までに分館報 Library に原稿を提出せよ」とのお達しがあり、ここでは学術誌のインパクト係数 (Impact Factor; 以下 IF) とはどのようなものであるかを例を挙げ、その仕組みについて少し紹介してみようと考えた。また本文の最後部に、平成 12 年度に繊維学部分館で購読することが内定している基本雑誌の最新 IF 値 (1997 年度版) を付表にしておいた。

IF は学術誌の編集や研究評価などに影響を及ぼし、われわれが研究成果を論文として公表していくときにも無視できないものになっている。すなわち画期的な結果が得られたならばそれは読者層が幅広く IF の高い雑誌に投稿して掲載してもらおうとするし、それなりの成果の場合はそれなりの雑誌を論文の投稿先として選択するだろう。そのとき IF は各々の研究分野において関連する学術誌をランク(格)付けしておくひとつの材料になると思われる。IF とは Institute for Scientific Information (フィラデルフィア、USA : <http://www.isinet.com/>; 以下 ISI) 社が発表する Science Citation Index[®] (以下 SCI[®]) : Journal Citation Reports[®] (以下 JCR[®]) にあるひとつのパラメータで、ISI が保有するデータベースを基にして算出される。そのデータベースは自然科学から人文科学にわたる領域の 16,000 以上の国際学術誌、著書、および学会報告誌を網羅し、ISI からの出版物として有名な Current Contents[®] (7 分野に分けて 7,000 以上の雑誌タイトル・抄録を収載) へ載っているかどうかはその学術誌にとっての IF の獲得や増減にかなり大きく影響する。

IF は個々の論文ではなく学術誌そのものに対して付けられる係数で、ある学術誌のある年度における値は次の式によって算出される。

$$\text{ある年の IF} = \frac{\text{ある年の総被引用論文のうち前々年と前年に掲載分の論分数 (述べ数)}}{\text{前々年と前年に掲載分の論文総数}}$$

ここで私が自身の研究成果を公表するのに比較的よく利用している生殖生物学領域の専門誌、Theriogenology 誌 (Elsevier) について実例を挙げて計算してみよう (表 1)。最新の数値である 1997 年版を見

た場合、1997年の被引用論文の総数 4,493のうち 822が前々年と前年、すなわち 1995年と 1996年に発表された論文を引用したもので、この数(822)をそれぞれの年に掲載された 220報と 256報の計(476)で割った値がこの年の IF(1.727)なのである。

表 1. 過去 5 年間('93~'97)における Theriogenology 誌のインパクト係数、

被引用論文数、および掲載論文数

	1993	1994	1995	1996	1997
インパクト係数	1.787	1.967	1.395	2.320	1.727
被引用論文数	3229	3522	3180	4732	4493
掲載論文数	223	286	220	256	245

ISIがデータ処理に要する時間は約1年で、現在知りうる最新のIFは1997年版のものである。集計結果はCD-ROM版でも提供(有料)されており、生命科学系雑誌の一部のIFはインターネット上(<http://www.mdc-berlin.de/biblio/impact.htm>)で見られる(無料)。上位誌10傑を見てみると、①Annu Rev Biochem(40.782)、②Nature Genet(38.854)、③Annu Rev Immunol(37.796)、④Cell(37.297)、⑤Nature Med(28.114)、⑥New Engl J Med(27.766)、⑦Nature(27.268)、⑧Science(24.676)、⑨Endocr Rev(23.017)、⑩Annu Rev Neurosci(21.952)、の順となっており、総説誌や研究者人口の多い分野の雑誌ではIFが高くなっているのがわかる。さらに読者層の幅が広いNatureやScienceのような総合科学雑誌のIFもかなり高い。IFが高いことそのものは投稿者にとって必ずしも不利益になることはないので、専門誌の編集委員会の多くは「良質でタイムリーであれば引用される頻度が高い総説記事」を積極的に掲載するよう努めていると聞く。

ISIがJCR®に公表している学術誌評価のパラメータにはIFの他に、Immediacy Index(=その当該年度に掲載された論文の引用数が当該年度の掲載論文数に占める割合)や Cited half-line(=当該年度の被引用論文数の1/2が何年前までに掲載された論文についてなされたか)、などがある。これらのなかでもIFがもっとも注意を払われているものであることに間違いはなく、例えば学術誌の編集に携わっているなどの理由で特定の学術誌におけるIFの変化(±30%は誤差変動範囲内か?)に一喜一憂する気持ちは多少なりとも理解できる。また近い将来の研究費助成審査等、IFでそれなりの評価を受けている学術誌に公表していることは必

要最低条件で、自分が発表した個々の論文がどれだけ引用の対象になったか(SCI で検索可能)を考慮する、という動きも無視できない。さらにはどのようなところ(序文、方法、考察など)で引用されたかが重要視されるべきだ、という意見もある。しかしもともと学術誌や研究の評価を客観的にしようとする自体に無理があるのかもしれない、教育・研究を行なって生計を立てているわれわれが知り得た科学的事実の公表を通して社会に貢献していくという本来の役割を考えたとき、所詮は個々の論文ではなくて雑誌の格を反映するだけの「数値」に必要以上に振り回されないようにしたいと思っている。(余談になってしまうが、「学術誌」を「大学」に、「個々の論文」を「学生」に置き換えるとちょっと面白い図が見えてくる。投稿前の論文は「受験生」、掲載後の論文は「大学生」といった具合に。そうすると指し詰め「IF」は外部評価に基づく「偏差値」といったところだろうか?)

実はこの文章を書き終えてあとは次頁の付表に貼り込むデータを調べるだけという段階になって、機能高分子学科の英先生が「Journal Citation Reports[®]と雑誌の Impact Factor」という原稿を平成9年2月4日発行の Library22 号に既にお書きになっていたのを知ってしまった。その発行日付ならば私はこの大学にいた筈なのだが、なぜだか読んだ記憶がまったくない。私が図書委員を務める以前のこのような無礼を詫びながらバックナンバーを読ませて貰い、英先生の文面は私の拙文とは少し違ったトーンで書かれていたことを唯一の救いとし、恥ずかしながらこのまま原稿を提出させていただくことにした。……「これが研究成果の投稿論文でなくてよかった」とつくづく思う。なぜなら諦めて投稿そのものを取り下げざるを得なかったか、「既報で明らかにされていることに対する上積みが少ないため本論文は不採用」なんていう審査結果を受け取る羽目になっていたであろうから。

以上

「オブラディオブラダ」愚考

機能機械学科 小西 哉

ビートルズの作品「OB-LA-DI, OB-LA-DA」はポピュラーな曲である。その発表から30年以上経過した現在、小学生でも知っている「スタンダード・ナンバー」になっている。あまりにポピュラーであるが、その歌詞をじっくり眺めたことのある人は意外に少ないかもしれない。私もその例に漏れない。ところが、最近あるきっかけでこの曲を繰り返し聴き、歌詞を繰り返し眺める機会があり、不思議なことに気がついた。

まずはオリジナルの歌詞を以下に紹介しよう。引用しやすいように、歌詞の節(英語で stanza という)に番号を付けてある。

「OB-LA-DI, OB-LA-DA」

(1)

Desmond has a barrow in the market place
Molly is the singer in a band
Desmond says to Molly girl I like your face
And Molly says this as she takes him by the hand

(2)

* Ob la di ob la da life goes on bra
La la how the life goes on
Ob la di ob la da life goes on bra
La la how the life goes on

(3)～(5) 編注:略

(6)

Happy ever after in the market place
Desmond lets the children lend a hand

Molly stays at home and does her pretty face
And in the evening she still sings it with the band

(7)

* Refrain

(8) 編注:略

(9)

Happy ever after in the market place
Molly lets the children lend a hand
Desmond stays at home and does his pretty face
And in the evening she's a singer with the band

(10)

* Refrain

(11)

And if you want some fun, take ob la di bla da

さて、この歌詞の何が不思議かというと、第9節の詩が何とも奇妙である。第9節の1行目、

Happy ever after in the market place

は問題ない。2行目では、

Molly lets the children lend a hand

となっており、Molly が市場で働いていることになる。第6節では Desmond が子供たちに手伝わせていた。夫婦共同して労働に精を出す姿と思えば、まあこれは不思議ではないでしょう。しかし3行目前半でやおら様子がおかしくなってくる。

Desmond stays at home

第6節では、家にいるのは Molly であった。Desmond が市場で働いている間に、家で家事をこなしている Molly の姿を描写していた。まあ、男女平等の世の中だから、たまに Molly が市場で働いて、Desmond が家において家事をこなすこともあろう。ということで、とりあえず、これもよしでしょう。しかし、3行目後半、

and does his pretty face

これはちょっとアブない。Desmond は Molly の夫であり、可愛い子供たちの父親である。その Desmond が、何の目的でお化粧をしているのだろう。さらに、4行目、And in the evening she's a singer with the band この she はいったい誰であろうか。化粧をして女装した Desmond であろうか。それとも市場での仕事を終えて帰宅した Molly が、バンド専属の歌手として夜の仕事に再び出かけるのか。これでは働き者の Molly とぐうたら亭主の Desmond ということになってし

まう。歌全体の統一感が失われてしまって、なんとも妙なことになるのである。

ビートルズの曲の歌詞は、メンバーの個人的体験から題材を採ったものがいくつもあると言われている。この曲もその可能性が高いので、歌が作られた背景を解明しないと、この歌詞に関する疑問点は解けない。ちなみに、参考文献[1]ではビートルズの曲を54曲も取り上げて、そこで使われている英語の解説を試みているが、不思議なことに「オブラディオブラダ」は登場しない。こういうことにこだわって深く掘り下げる人が世間には結構いる。とくに最近では、個人的興味の対象について蓄積したデータをインターネット上に公開する人が増えているので、そのうちに手がかりが得られるだろうと期待している。

ところで、題名とリフレイン部分に使われている「オブラディオブラダ」は歌詞カードを見ると OB-LA-DI, OB-LA-DA と綴られている。この言葉の綴りと意味についても議論のあるところであるが、紙幅がつかた。

参考文献

[1]小島 智 : ビートルズで英会話 (1998年 KKベストセラーズ ワニ文庫)